

# ランボーの「客観的な詩」について

—ハインリッヒ・ハイネの『ドイツ論』を中心とする  
文学，思想観からみて

佐藤千明

ハインリッヒ・ハイネ（1797-1856）の詩や評論は、今では研究者でもなければ、ほとんど読まれないのかもしれない。もっともヨーロッパ、特に旧西ドイツでは、主に反・民族主義者として、大いなる再評価の恩恵に浴しているようである<sup>(1)</sup>。かつては、そうした特別な関心のもたれかたからは想像もつかないほど、その盛名はライン河をはさんで両国にまたがりとりわけ 1830 年代から 70 年代のフランス文壇にあっては、大変なもてはやされ方であった<sup>(2)</sup>。大胆かつ、辛らつでありながらも軽妙、洒脱な皮肉の構えを頑なまでに維持したまま、ハイネは深刻な政治問題、社会問題にも積極的に口を出し、国家統一を目指すドイツでは、ユダヤ人であることも手伝って、イデオロギー的スタンスの取り方、真意のほどをめぐって何かと問題視されていたのであったが、1831 年以來の亡命の地フランスでの影響力については、ボードレールの証言に従って、官能的なマテリアリストの審美家として「異教派」の始祖といった役どころが、まずは挙げられる。古典古代の理想美をあえて表層的に、感覺的に捉えて絶対視し、内なる魂の問題を等閑視する一群の新進の作家たちは、ハイネを読みすぎたのだとボードレールは苛立たしげに衆知の評論で難じている<sup>(3)</sup>。そして実際ハイネは、バンヴィル、ヴェルレーヌ、マラルメ、それに彼らを含めて「高踏派」と呼ばれる詩人たちに、ときに容易に見分けられるほどの大きな影響を及ぼしている。個々の影響関係について、ここで立ち入って論じ

る余裕はないが、60年代の若き前衛作家たちの活動全般を対象とするバ  
デスコの浩瀚な論評からは、詩想の奔放で自在なひらめきを赴くままに、  
鮮やかにとらえてみせる審美家、またモラルに囚われない官能的な綺想  
家・ファンテジストとしてのハイネのイメージが大きく浮かびあがって  
くる<sup>(4)</sup>。一大流行をまきおこした、文壇の寵児であった。

詩人たちを時代の思潮のなかに位置づけるうえで、ハイネは有意義な基  
準点になりうるわけであるが、さてアルチュール・ランボーとの関係につ  
いては、細かい類似を別にすれば、とりわけ大きく扱われてきてはいない。  
ラディカルな反逆の詩人ランボーと、皮肉に長け、イデオロギー的な曖昧  
さに洗練された都会人のセンスを織り交ぜてみせるハイネの詩想とでは、  
いかにもかけ離れてみえるかもしれない。またランボー自身が、直接ハイ  
ネに言及した形跡も残っているわけではない。一般にランボーの場合、確  
たる傍証となる資料が極めて乏しく、おうおうにして論考も慎重にならざ  
るをえないという事情もあるだろう。影響関係を厳密に、狭く捉える伝統  
的、実証的な考え方が、ともすると足枷になりがちなケースである。とは  
いえ、博識で名高いジャンゲールがかつて指摘したように<sup>(5)</sup>、「客観的な詩」  
と名づける新しい詩をランボーがパリ・コミューン時に構想するにあたっ  
て、ハイネの「ドイツにおける宗教と哲学の歴史のために」の一節と注目  
すべき類似点が見て取れるのだ。ジャンゲールは自身の、率直に言って余り  
に恣意的な解釈論の傍証として、註記でこの類似に言及するにとどまっ  
ているのだが、本論ではこの著作全体の趣旨、そしてそれが70年、71年の  
普仏戦争、パリ・コミューン時に持ちえたであろう意味の観点から考えて  
みたい。高踏的な審美家である以上に、48年の「ヨーロッパの春」が無  
残にも潰えた後、いわゆるユダヤ・キリスト教への「回心」を経てもなお、  
最晩年も「自由の闘志」であることを止めなかったハイネとの、対話的と  
言える照らし合わせの試みであり、従来あまり言及されてこなかったラン  
ボーとの近さを確認すると同時に、また彼ら二人の間の決定的な相違を測  
定することになるだろう。

「ドイツにおける宗教と哲学の歴史のために」は、フランス語版では「ロマン派」と題された小論、その他と合わせて、『ドイツ論』とスタール夫人の名著と同じ総題のもとに収録されている<sup>(6)</sup>。そのエッセー集は、夫人の残した母国のイメージを修正するという、あからさまにポレミックな意図を「序」で示していることもさることながら、外国人を直接的な読者に設定していることも多分にあるのだろう、全体として論調、趣旨もハイネにあっては特筆に値するほど闘争的な読み物になっている。その中心をなす「ドイツにおける宗教と哲学の歴史のために」も、宗教、哲学、文学を現実に向きあう社会的、歴史的ポジションから読み解こうとし、その際にキリスト教の「精神主義」による現実否認に対して、「感覚主義」の身体的・物質的な生の享受を軸に立てて、ヘーゲル左派の先駆をなすものと見做されている。実際、フランスに比し政治的に遅れているドイツにおいて、思想上の変革に裏打ちされる一層本質的な革命が可能であり、また望まれるとして、その展望を一途に、ときに激した口吻で説いている。フランスでは熱にうかれた詩人の夢想と軽くあしらわれることもないわけではなかったが<sup>(7)</sup>、しかしながら、普仏戦争の敗北、そしてパリ・コミューンの正に壊滅のさなかにあつて新たな関心の対象となりえたのではないだろうか。ハイネが一貫してその国家主義、帝国主義的野望を非難しつづけてきたプロイセンがいま宿願達成を目前にして、コミューン解体の一点についてはヴェルサイユ政府と利害をともし、内戦を遠巻きに包囲、監視する状況のさなかのことである。

さて問題の一節は、フィヒテの唯我論的傾向について、観念の一般性の見地から誤解を解いておこうとする箇所である。

フィヒテの自我は個別的自我などではなく、自意識に到達した普遍的  
世界自我だったのである。フィヒテの思考は、一個人ヨーハン・ゴット  
リープ・フィヒテという名の、特定の人間の思考ではないのだ。それは  
むしろ、ある個人の中に顕現した普遍的思考なのである。「あるものが

雨を降らせる」,「あるものが稲光を発する」等々と言われるように、フィヒテも「私が考える」と言うのではなく、「あるものが考える」とか、「普遍的世界思考が私の中で考える」と言うべきところなのだろう<sup>(8)</sup>。

他方ランボーもまた、「私が考える」と言うべきではない<sup>(9)</sup>、作家を自認する者も大抵は、「普遍的世界知性」(《l'intelligence universelle》)の産物をただ受動的に、にもかかわらず我が物顔に摘み取るばかりの「エゴイスト」と、その詩論に展開している<sup>(10)</sup>。ハイネの引用箇所についてジャングーは、ヴェラの当時の概説を取り上げて、「私」に出来る偶発的な思考と区別されるべき一般理念の優位性を指摘する。観念論としては正当な見解とはいえ、しかしながら、はたしてそこに、ラディカルな詩の変革を目指すランボーの真意をみることができるのか、疑問と言わざるをえない。ハイネの引用文の最後のところの伝語(《la pensée universelle pense en moi》)からも窺えるように、できあがった抽象観念から出発して、構成する精神へと逆向きに進むフィヒテのトートロジックな不毛さを、実はハイネもはっきりと批判しており、ランボーにあっても、そうした思考の閉塞性に的を絞ってそれを打破することが目論まれているのではないだろうか。「私が考える」に代えるべきとランボーが持ち出す《On me pense》(「人が私を考える」,「人が私において考える」など)と比べると、フィヒテの循環論的発想はいやがうえにも際立って見える。このランボー・ヴァージョンは、確かに、文法的にも不安定な表現であるうえに、文中唐突に持ち出される観がある。意図するところを容易に捉えきれない性質のものではない。がしかし、観念はあくまでも一つの結果であるにすぎず、それを生み出す実際の、潜在的な可能性をはらむプロセスのほうに重点が置きなおされていると、ひとまず述べることはできるだろう。「考える」行為の主語の位置に誤って「私」は据えられていたとして、その「私」を対象へと移行させ、それに合わせて、構想中の来るべき詩をランボーは「客観的な詩」と名づけ、従来の「主観的な詩」に無効の判決を下そうとするの

である。新しい詩を要約する観点として、また「エゴイスト」の閉鎖性と  
その彼方をともどもに指し示す一般原理として持ち出されるこの《On me  
pense》については、後で見えてゆくことにして、ここで先ず指摘しておき  
たいのは、ハイネ自身は、神即世界の汎神論的絶対者に相対して人間精神  
の、明澄ではあるが限定的、部分的なあり方を説くスピノザの一元論的見  
地を取り上げ、そこに自らの進歩史観を依拠させようとしていることであ  
る。

その説によれば、絶対者は、植物・動物を含めて有形、無形の一切の万  
象のうちに顕現し、人間精神はそもそも絶対者の「無限思考の一条の光」  
に過ぎないとはいえ、その自意識を介して、漸進的、多面的な啓示を得る  
という<sup>(11)</sup>。キリスト教の伝統的霊肉二元論とは反対に、それに抗して生  
の謳歌を肯うため、身体的・物理的生に精神が敬うべき神聖さを取り戻そ  
うとする復権の要求に他ならない。スピノザの汎神論、そしてそれを受け  
継ぐシェリングによって復活させられたキリスト教以前の、キリスト教支  
配下にも生きながらえた古来からの汎神論的自然哲学のうちに、ハイネは、  
フィヒテを含めてドイツ観念論の淵源をみ、そしてまたそこに、体系哲学  
としてはヘーゲルによって完成させられるのとは別に、「自然の根源的な  
諸力」に融合、合致し、いかなる軛にも縛られず、また何ものも抗えない  
ようなラディカルな革命の可能性を汲もうとするのである<sup>(12)</sup>。人間を、  
特権的な理性的存在と認めたくえで、自然から切り離せないとするのは、  
ハイネの現実主義的、あるいは時に現生主義的とも言える持論のひとつで  
あり、例えば人間の専制支配からの解放を求める熊を主人公にする風刺詩  
『アッタ・トロール』をはじめ、人間の動物化、動物の人間化に、ユーモラ  
スな皮肉の才を大いに揮っている。

さて、「未知なるもの」を追い求めるランボー的な理想の詩人にあつて  
も、負うべき領野は「人間性」を超えていると、わざわざ「動物すらも」  
と強調して追加されていて<sup>(13)</sup>、そしてその件にすぐ続けて、「火の盗人」  
たるプロメテウスの詩人は「自身が案出したものを感じさせ、触れて

みさせ、耳に聴こえさせなければならないだろう」<sup>(14)</sup>とされているように、観念の手前の「感覚主義」的、マテリアルな表現のありかたに「進歩」の詩的实践が求められようとしている。「私の考え」、また「考える私」が、それをはるかに超える、あるいは全的に汲み尽くしえない何か大きなものに包み込まれていて、自らの変容を賭してもその現実化の促しに答えようとする詩法と、大まかに言えるのではないか。そうした方向性はこの時期のランボオの詩作品にも反映されていると思われるのだが、「僕のかわいい恋人たち」を一例に挙げると<sup>(15)</sup>、恋人たちとその関係についての紋切り型のイメージを、「青」、「ブロンド」、「褐色」、「黒」の色彩のもとに一括りに要約して、清純、官能性といった出来合いのコノテーションへの、標識と化した色彩の従属関係が問題視されている。そこで破棄されようとするのは、実際、個々の恋愛体験などではなく、それに形を与える観念連合の恣意性であり、そうして染め上げられてしまう、今や怒れる「僕」の内面なのである。聖書の創造神話を下敷きに、それにとって代ろうとする詩的世界の構築を、色彩の一見脈絡の無い観念連合の斬新で自由な組み合わせに、すべからく委ねてみせる「母音」のソネの試みも、同じ方向線上に位置づけることができるだろう<sup>(16)</sup>。

精神の限定的な在り方を前提にする点については、スピノザ汎神論の基本的立場を、「神を否定している」のではなく「人間を否定している」とするハイネの要約が思い浮かぶ<sup>(17)</sup>。先に引用したハイネの文中の「あるものが雨を降らせる」が、ランボオに想を汲み、捧げられたとされるヴェルレーヌの名高い詩を連想させることも、あながち偶然ばかりとは言えないかもしれない<sup>(18)</sup>。ランボオの言い方を借りるならば「普遍的世界知性」の平常な状態とでも言える常套的表現に託された思考の制約を超えて、雨とも涙とも判然とし難い、主客の区別も不分明に溶解する領域へと乗り出しているのだから。認識主体の「考える私」を玉座に据える観念論の人間主義を、近代的文明化の偉大なる要因として称揚しつつも、その枠を超えて変容を受け入れるまでの、例えば詩的直観による拡張を夢見るアンビヴ

アレントな姿勢を、ランボーはハイネのうちに読み取ることができたのではないだろうか。そこからさらに、どこへ歩を進めようとしているかについては、実際の作品から検討してみようと思うのだが、「私」の疑いなき自己肥大として、利己的な我有化の原理に容易に堕しかねない観念論的人間主義の限界、そして深刻な脅威を、プロイセンの、いま身をもって実感させられている圧倒的な、獷猛なまでの科学主義的、軍国主義的成功に見る向きがこの時代にあったことも、考慮すべき背景要因として是非とも指摘しておきたい<sup>(19)</sup>。

「私の考え」に先んじるとされる「普遍的世界知性」の活動は、一般理念の境域に尽きずに、常套的表現や紋切り型に否定的な、固定された様態をうつし出して、変革の試みを誘い、また他方、当然ながら、時代の胎動のうちに相応の「自然な」進展を遂げるということになるのだろう。「回心」前はヘーゲル学徒であることを誇りもするハイネが、「私の考え」に向けられるランボーのラディカルな疑義の視線を共有しえたかどうかは疑わしい。だが、ランボーの観点からするならば、解放的「進歩」についてのハイネの大胆な自由主義的発想は、基本的方向性において引き継がれるとは言えるだろう。事実、同時代の動きに注意深くつき従い、意識されざる欲求、願望をも捉えようとするのは、しばしば明言されるように、ハイネが時評家として自らに課す基本的なスタンスでもあって、そうした姿勢は『フランスの事情』、『ルテーチア』を初め、旅行記などの様々なエッセーに、単なる印象主義的批評以上の深みをもたらしている。そしてハイネ自身、自らの功績として、まだ広範な傾向にとどまっていた、ひとつの自覚的なまとまりをなしていなかったものに、「 Kommunismus」の名を献じたことを数え入れている。とはいえ、その動向に歴史の必然を見つつも、しかし自らは、言わば審美家としての「私」を盾にして、慎重な距離を設け、生理的なまでの嫌悪感を隠さないのであるが。さて、作家の根本的なポジションの問題につながるこうした「私」の設定の仕方について、ランボーの相違、いや不満までも推測してみたいのだが、その根拠として、新し

い詩の構想時に作られ、詩論を述べる私信に紹介される「盗まれた心臓」という詩を取り上げよう<sup>(20)</sup>。その手紙を送られる恩師イザンバルに加えて、地方詩人ドムニー、そしてヴェルレーヌと、当時身近に接することのできた主だった年長の文学者すべてに、細部を変えながら送っており、格別に重要な作品だったはずだ。

周知のように解釈の特に難しい詩で、かつては伝記的見地から、ランボーが実際に遭遇したとされる経験を作中に読みとる傾向が優勢であったが、近年は、詩人の社会におけるあり方を問う批判的な寓意を展開するものとして、ボードレルの「あほうどり」、語らい、ルコント・ド・リールの「見世物師」などとの比較がなされている<sup>(21)</sup>。語の多義性を幾重にも組織的に活用している観のある作品なのだが、異文のひとつに「道化」と示される「僕」が、切々と繰り返す自身の「心」に呼びかけながら、そのかけがえの無い、執着的たるものが卑しい周囲との接触により、すっかり穢されたと嘆く図は、確かに、感傷的でナルシスティックな詩人の社会的周縁化に関する当時の文学的テーマに沿うものと見做せる。「私」の「私」であることに素直に、疑念を抱かず依拠するロマン主義的叙情が問題視されていることになるわけで、その批判の矛先が向けられる標的にハイネをあげることができると思われるのだ。先にランボーの「不満」を述べたが、実際、無視し難い接点を、今度は「流刑の神々」から指摘しよう<sup>(22)</sup>。1855年の『ドイツ論』仏語版、第二巻に収められている小論で、「ドイツにおける宗教と哲学の歴史のために」と同じ関心下に、キリスト教により断罪、追放された古代の神々の跡を北方の民間伝承などに追い求めている。

取り上げたいのは、船の上で水夫たちによって演じられる水の秘儀の場面で、キリスト教による迫害を受けることが最も少なかった神の一人とされる海神ネプトゥヌスは、自身の領域に踏み込んだ新参者に対して海水による洗礼を施した後、「長い、おごそかな演説をぶつ」。そして注目すべきことに、その演説は「船乗り仲間の下品な冗談」で一杯で、「しかも、しゃべるといふより、口にかんだ煙草の黄色く、えがらいヤニといっしょに

吐き」出されるという有様で、聴衆は「タールを塗られた」ようで、大喜びだという<sup>(23)</sup>。ランボールの作品では、海上の船とも兵舎ともつかない設定になってはいるが、「一斉に笑う」「群れ」に取り囲まれ、「冷やかし」とともに「煙草の噛み汁」を「心」に、「べったり覆われる」までに浴びせかけられる「僕」は、ハイネの新参者と極めて似た状況にあると言えるだろう。水夫の仲間入りのイニシエーションに、かたや「心」を穢され、「引きずり墮される」事態が対応することになる。無論、ランボールの方には海神は登場しない。その秘儀が言わば現実になったような状況は、海神に代わって、「兵隊さんじみた」「群れ」によってもたらされている。そして、この相違にこそ注意を払いたいのだが、ランボールの「群れ」には《bachiques》、《ithyphaliques》と、ハイネの「流刑の神々」で生の謳歌を司るものとして特に大きな位置を与えられている酒と生殖の神バッカスのしるしがそのまま与えられているのだ<sup>(24)</sup>。キリスト教の支配下での凋落をハイネが深く嘆き、いとおしむ古代の神々の、思いがけない、そしてハイネ自身決して受け入れることができなかつたであろう再生のかたちを、そこに見ることができる。実際、安煙草と下卑た言葉使いとは、ハイネが度々嫌悪をもって描いた、運動家と革命に身を投じようとする民衆の指標であり<sup>(25)</sup>、「謝肉祭的」と伝承に言われる海の秘儀がトラウマ的な汚辱の悲劇に転じてしまうさまは、民衆の台頭に真の理解と共感を寄せながら、時に発作的にも同化を拒まずにはいられなかつたハイネの在りように重なる。

圧制に苦しむ「国民」に仕え、慰め、励まし、導びく「道化」の姿は、ハイネが好んで自らに認めた詩人像ではある<sup>(26)</sup>。が、しかし、「盗まれた心臓」を紹介する手紙でのランボールとは異なって、彼は《s'encrapuler》「下賤の徒と化す」ことを、たとえ挑発を目的としても、来るべき詩人の条件にはなしえなかつたであろう<sup>(27)</sup>。ハイネは、寸評を含め、ロッシーニ、友人のドイツ人作家ラウベなどについての評論で度々述べるように、生来の美的感覚に芸術家の特質を見、その特権視を正当化するのであ

り<sup>(28)</sup>、それに対しランボーは、感じるままの調和、安逸に自己を受け入れ、楽しむどころか、「感覚の錯乱」の実験を通して「詩人に生まれる」ことを自らに課し、そうして詩人としてパリ・コミューンに加担しようとする。「盗まれた心臓」の寓意に批判を託した問題点を、ハイネ的な距離の姿勢に見ることができると思われるのだ。事実ハイネは、近代共和制の原理的基盤が、理念の抽象性による一般化、普遍化にあることを称賛する一方で、実際問題としては、一様な平板さがはびこることを深刻に危惧し、尊ぶべき人格の 아우ラ にその救済策を求めて、反俗的な英雄礼賛にこだわり続ける。理想のあるべき姿を、精神的権威の体現者に託して一線を画そうとする姿勢は、様々な分野にわたっている。

端的には、ハイネは生の謳歌の表現を、古代の神々の心理的屈折に曇らされない、純粋で華麗なイメージに進んで求め、また芸術家自身について、才能の特権になり立つ、元来貴族的なものと同主張して憚らない。さらには、現状に適った政治形態を、自由と権威との立憲王制による危うい均衡のうちに問おうとすることも、晩年の人格神への帰依の問題に加えて、挙げることができるだろう<sup>(29)</sup>。そこには、権威についての根本的な問いとして、従来からの物理的、外的な自明性の基盤を奪われ、言わば内なる精神的領域に追い込まれた状況を、時代の危機と受け止める問題意識が推測される。そして、そのような危機の認識は、パリ・コミューンがかつて無いほどに先鋭化させたものに他ならない。民衆による自治を実現するにあたって、コミューンは個々の人格の土台から権力を切り離し、相互承認に基づく機能の委任のコンテクストに据えなおしたのであり、ハイネの選択は、実際、コミューンと敗戦後のフランスに深刻な危機感を抱く保守的知識人たちに、王党派、貴族主義、共和制的愛国主義、プロイセンの科学主義に範を取ろうとするルナンのような知的エリート主義と、党派の違いを超えて広く見受けられる選別主義的反応の基本路線に重なるのである<sup>(30)</sup>。

「盗まれた心臓」に戻ってみると、神々を登場させずに、ひとときのお祭り騒ぎに興じる「群れ」にその聖なるしるしを委ねる点には、まさに、権

威を疎外態におかずに、自ら担い、現実化するものと捉えるコミュニンの原理的政治観との呼応が指摘できるのではないだろうか<sup>(31)</sup>。いずれにあっても、確たる不動の本質を有する「私」を崇め、守るべく、高々と設けられた壁の内側に囲い込もうとするのではなく、逆に、変容の可能性をともどもに共鳴させようとする企図が見てとれると思われるのだ。それはまた、「私が考える」に代えて、《On me pense》にランボーが託した新しい詩のあり方を示唆するものであるに違いない。「私」をそれ自体で成り立つ満ち足りたものとするかわりに、全体的な関係性のコンテクストに置くこと。この文言は、それを容れる手紙の冒頭部に記され、手紙の文脈を決定すると見える格言、《On se doit à la Société》「人は社会に自らを負っている」に、確かにこうして、忠実に応じることになる。 「盗まれた心臓」の最初の異文が示されるのは、この同じ手紙においてである。そして実際に、「私」による観念の我有化とその固定化とともに退けようとする詩法は、この時期以降のランボーの詩に、特有の難解さをもたらすことになる。「母音」のソネについて、既に簡単に述べたように、作品の特筆に値する断片的な性質は、単なる隠蔽のための隠蔽や、閉鎖的な自己満足で片付けられるものではなく、かえって柔軟な連想を促し、深めさせ、言わば内側から充填させるべく働きかけようとするものである。 「進歩の乗数」と化すことを引き受けようとする詩人にこそ、正に相応しい詩の試みと言えらう<sup>(32)</sup>。

ランボー的な「私」の変容とは、こうした共鳴枠の実現と探求のうちに企てられ、なおかつ既存の認識の彼方の「未知なるもの」を志向する詩法であると、以上の検討から要約することができるのではないだろうか。本論を終えるにあたって、この最後の点についての事情を、「ジャンヌ・マリーの手」というパリ・コミュニンと直接扱う同時期のランボーの詩に、簡単ながら見てみよう<sup>(33)</sup>。そこに描かれるコミュニンの闘士は、女性に代表されることが意味深くも示すように、具体的な生活条件や明確な階級意識により規定されるような、輪郭の確かな運動主体などではなく、逆に、

「私」であることを忘れさせ、不可能にさえするような、自らを凌駕する圧倒的な覚醒に突如見舞われて、「黒い血」に宿した鬱積したエネルギーを解き放ち、そして現実の所与の条件にただ「否」と立ち上がり、同志的友愛に結ばれて生死を賭けて闘った名も無い者たちであり、このようなコミュニケーション観を背景において、ランボーは、その原理的権力観を「錯乱」の詩学に結びえたのではなかったのだろうか。それはまた、陶酔する「私」の神格化という、それ自体ハイネも首肯し、ランボーに近いところでは例えばボードレールも惹きつけられたヘーゲルの「絶対者」の変異形ともいえる事がらに<sup>(34)</sup>、本質的変更を〈内〉と〈外〉において迫り、「私」と「非・私」との関係について新たな思考をその両面で開く事態であると言えるだろう。生の「感覚主義」による神聖なる享受を直接、社会批判、変革の試みにむすびつけようとする事、時代の一大課題とも言えるこの企ては、「異教派」を難じるボードレールの目には個と一般のレベルを混同する胡乱で奇怪な空論と映り、また長年それを夢見続けたハイネ自身にとっても、考える者と行為者との幾重にも折りたたまれる心理的葛藤の苦渋にみちた分裂をもたらすものであったが<sup>(35)</sup>、しかしながらランボーは、そうした否定的な見解にかわる新たな回答を「客観的な詩」の構想に用意しようとしていたのである。

## 註

- (1) 日本、ドイツ本国、そして欧米でのハイネ研究の歴史、現在の成果と問題点について、特に木庭宏の諸著作から多くを学ばせていただいた。門外漢であるドイツ文学の作家を、比較の項とはいえ、論考の対象に据えるにあたって、その正鵠な考察に導きの手をお借りできたことをお礼申し上げたい。『ハイネとユダヤの問題』、松籟社、1981。『民族主義との闘い』、松籟社、1987。『神とたたかう者』、松籟社、1995。『ハイネ、挑発するアポリア』松籟社、2001。  
本論中でのハイネに関する言及については、直接の引用も、また参照箇所の指示も、物理的理由から、必要最低限にとどめざるをえなかった。
- (2) 最後のロマン主義者にして、象徴派・世紀末アカダグスの先駆者としての

ハイネの文学史的位罫については次の文献を挙げておこう。Kurt Weinberg, *Henri Heine, "romantique défroqué"*, Yale University Presse: PUF, 1954.

- (3) Charles Baudelaire, *Oeuvres complètes*, Gallimard, 1961, p. 624.
- (4) Luc Badesco, *La Génération poétique de 1860*, Nizet, 1971.
- (5) Jacques Gengoux, *Pensée poétique de Rimbaud*, Nizet, 1950, p. 42.
- (6) 『ハイネ散文作品集第4巻』, 松籟社, 1994.  
Henri Heine, *De L'Allemagne*, Michel-Lévy, 1855. 1835年仏語版に加筆, 修正を施し, 「流刑の神々」(1853年初出), 「回心」後の後記ともと言える「告白」(1854年完成)などを加えて, 大幅な再編をしたもの。ハイネの壮年期から晩年までの道りを凝縮したような作りになっている。
- (7) 例えはドイツ文壇の解説者を任じ, ハイネの翻訳も手がけている Saint-René Taillandier の次の論文を参照。《Poètes contemporains de l'Allemagne: Henri Heine, sa vie et ses écrits》, *Revue des deux mondes*, 1852, avril, 1er, p. 5-36, 特に p. 23-25.
- (8) 前掲書, 113頁。Op. cit., p. 139.
- (9) Arthur Rimbaud, *Oeuvres*, Garnier, 1987, p. 346. 本論中の訳語については, コンテキストの要請などから一部置き換えたりしたが, 『ランボー全集』(青土社, 2006, 平井啓之, 湯浅博雄, 中地義和, 川那部保明訳)を主に参照させていただいた。
- (10) Ibid., p. 348.
- (11) 前掲書, 68-74頁。思想史的には, スピノザの永劫不動の静的な世界観に, サン・シモニズムの進歩史観を組み合わせるものと位置づけられる。
- (12) 同書, 136-141頁。後年, 「ドイツにおける宗教と哲学の歴史のために」について言及する際, そこで述べられている未来のドイツ革命を, 例えは「告白」ではヘーゲル哲学の影響下にある活発な無神論的 Kommunismus に関連付け, 「ドイツに関する書簡」(死後出版)では, マルクスらヘーゲル左派主導の共産主義に基づくものと明言するのであるが, 「ドイツにおける宗教と哲学の歴史のために」のなかにあつては, 破壊そのものを目指すような曖昧な, その射程については様々な解釈を許す未曾有の大変動を「予言」するにとどまっている(「告白」, 『ハイネ散文作品集第3巻』, 松籟社, 1992, 178-179頁。「ドイツに関する書簡」, 『ハイネ散文作品集第5巻』, 松籟社, 1995, 195頁)。「ドイツにおける宗教と哲学の歴史のため

に」での汎神論的見解が、「告白」でハイネが主張するように無神論とばかり決め付けられないことは、木庭も説く通りである（『神とたたかう者』、前掲書、58頁）。

- (13) Op. cit., p. 349. 基本的にハイネは動物を明確な寓意とするのだが、そうした枠取りは、ランボーにあっては無視されている。
- (14) Ibid.
- (15) Ibid., p. 90-92.
- (16) Ibid., p. 110.

同様の観点から、「僕のかわいい恋人たち」について、《lunes aux pialats ronds》「丸いべちよべちよのある」「お月様」とでも訳せる、造語を含む難解な表現について、ハイネが好んで批判がましく取りあげる、師ヘーゲルの「星」を「空の光る癩の斑」とする生理的、即物的イメージを近づけることも興味深く思われる。詩情を解さない非文学的感性の、あるいは慣習的な詩情に意図して逆らうためとも取れる例として紹介されている（「告白」、180頁。仏語は《lèpre luisante sur la face du ciel》。op. cit., p. 293）。本論でみていくように、ランボーの詩的変革の企ては、その射程において、ハイネの美的感性の枠をはるかに超える性質のものである。

- (17) 前掲書、68頁。人間を神の似姿として特権化、隔絶化する点に、ユダヤ・キリスト教を汎神論的発想から分かつ大きな特徴の一つがあることも、念のために記しておこう。この人格の、宗教観に直接かかわる捉え方に関して、ハイネは晩年の「回心」ともつながっていくと思われる曖昧な見地にとどまり、後に本論でみるように、ランボーとの大きな相違を生むことになる。
- (18) Paul Verlaine, 《Ariettes oubliées, III》, *Oeuvres poétiques complètes*, Gallimard, 1962, p. 192.
- (19) Par exemple, Paul de Saint Victor, *Barbares et bandits, La Prusse et la Commune, recueil des articles écrits pendant le siège de Paris*, Michel-Lévy frères, 1872, p. 175.
- (20) Op. cit., p. 100-101.
- (21) 作品それ自体が提起する意味のレベルの混交、多義性、また文学的参照関係の諸問題についての総括的研究として、Steve Murphy の次の文献があげられる。 *Le Premier Rimbaud, ou l'apprentissage de la subversion*, CNRF, 1991, p. 269-316.

当時の社会的、政治的コンテクストへの作品の位置づけについては、ブルジョワとアンチ・ブルジョワ＝コミュニオン派の、明快ではあるが図式的にすぎる対立に説明を帰してしまっていて、疑問が残る。この図式的観点にたって、《On me pense》の命題を含み、「盗まれた心臓」の最初の異文が示される5月13日付けの手紙を、受取人イザンバルとの個人的関係に引き付けて解釈している。

- (22) 『流刑の神々・精霊物語』、岩波書店、1980、小沢俊夫訳。細部にも目の行き届いた、こまやかな翻訳を、一部仏語版にもとづいて変更を加え、拝借させていただいた。
- (23) 同書、147-148頁。仏語版は、前掲書、228-229頁。
- (24) 同書、129-139頁。31年6月暴動の蜂起する民衆、そしてラマルチヌの著書を通してフランス革命と二月革命を、「バックス信徒」のイメージで語っていることも挙げておこう。「フランスの状態」、『ハイネ散文作品集第1巻』、松籟社、1989、230頁。「ルテーチア」、木庭宏責任編集、松籟社、1999、412-413頁。

ランボーの作中の「群れ」を、多くの注釈者はヴェルサイユ軍と関連付けているのだが、一見して否定的なイメージを、批判の対象とする者の視点から挑発的に借り受けることは、闘争手段として特に珍しくはない。同化の拒否を告発する趣旨に加えて、自己規定を全体的な関係性のうちにおこうとする姿勢に、実に相応しい手法と言えらう。

- (25) 典型例として、「ルートヴィヒ・ベルネ回想録」、76-80頁、また「告白」、175頁、『ハイネ散文作品集第3巻』、前掲書、いずれにも、「主権者たる民衆に握手される光榮に浴したならば、手を洗うだろう」と言われる。後者では、この嫌悪感から Kommunismus 的無神論を放棄することになったと述べられている。

ハイネは、「美」の理想を生の調和ある享受にみようとすると、基本的に古典主義的な従来からの観点から、晩年、時代状況との深刻化する齟齬のもとに、異教の神々へのもっぱらな追憶の思いを深めていくとするカウフマンの解釈も紹介しておこう。「ハインリッヒ・ハイネの文学史上の位置」、『ハイネとその時代』、1977、朝日出版社、317-349頁、特に337頁。

- (26) 例えば、「イギリス断章」、『ハイネ散文作品集第1巻』、80-81頁。ハイネの場合は、基本的に、王侯に仕える《fou》であって、ランボーの詩の「客寄せ道化」《pitre》の民衆的、大衆的とも言うる姿とは異なり、個

性の際立つ人格の重みとステータスを有している。二人の作家のポジションの違いが、ここにもよく見て取れると思われる。

- (27) Op. cit., p. 345.
- (28) 例えば、ロッシェーニについては『ルテーチア』、前掲書、236-239頁。ラウベについては、「ロマン派」、前掲書、273頁。また、ボードレールにも引き合いに出される、ドラクロワについての名高い一節では、芸術の根拠として「生来の象徴主義」を持ち上げている (*De la France*, Michel Lévy, 1857, p. 349)。既存の文化に影響、汚染されることの少ない幼年期の、芸術家にとっての重要さについては、Weinbergの前掲書、229-233頁を参照。もっともシェイクスピア論では、この天才作家に生来備わっている鏡としての偉大な、特筆に値する才能は、時代の特質を真に、柔軟に写しだす能力であるとされている（『シェイクスピア劇の女たち』、『ハイネ散文作品集第5巻』、前掲書、14-15頁参照）。
- (29) 「王たちは立ち去る。そして王たちとともに最後の詩人たちも退場する。 (...) 権威への信仰なくして偉大な詩人は出現しえない」と、「ルートヴィヒ・バルネ回想録」で述べるとおりである。『ハイネ散文作品集第3巻』、前掲書、144頁。文化、政治、宗教に関する、こうしたハイネの「カリスマ」信奉への根深い傾向については、例えば、木庭宏、『民族主義との闘い』、前掲書、159頁。
- (30) Par exemple, André Bellessort, *Les Intellectuels et l'avènement de la Troisième République* (1871-1875), Grasset, 1931.
- (31) 聖性に関して、直接政治的コンテクストにかかわらない領域においても、同様の観点が見られると思われる。ランボオの『後期韻文詩』中の「黄金時代」という作品を例にあげると、何とも知れないが神聖で、なおかつ「縁者のもの」とされる「声」が、「僕」に自ら「黄金時代」にあることを認めるよう、しかも正に今のいま生きつつある生のうちに認めるよう眩惑のうちに、有無を言わず説いている。ランボオの生の享受に関する古典神話の扱いかたには、回帰すべき本源性を、自己自身に関する問いのうちに逆に連れ戻し、そこから規定しなおそうとする、脱・構築的とも言える傾向がみられると思われる。

Chiaki Sato, 《L'inspiration synchrétique dans les Derniers Vers d'Arthur Rimbaud》, in *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*, 2005, p. 31-41.

佐藤千明, 「ランボオの「合一」的神話のかたち、—『後期韻文詩』にみ

る古典神話への諸宗教混淆の視点から」, 一橋論叢, 2005, 407-417 頁.

- (32) Op. cit., p. 349.
- (33) Ibid., p. 105-107.
- (34) ボードレールとヘーゲル哲学との接点については次を参照. Hubert Laforgue, *Antécédents du surréalisme*, Presses de l'Université d'Ottawa, 1988, chap. II. 本論の記述については特に 49 頁を参照. 陶醉する身体に媒介される「私」の崇高化を指摘している.
- (35) 「異教派」を心理的, また社会的事象において断罪するボードレールの非難の要点は, 現実認識の欠如と, そして特に伝統的なモラルの超越的「真理」を無視していることである (前掲書). ハイネについて, 典型的な例としては, 「ドイツ冬物語」第 6-7 章があげられる (『冬物語』, 岩波書店, 1938, 46-62 頁).